# 動物園ラブソティー

未来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
動物園ラブソティー

【Ｎコード】
Ｎ３４８２ＢＡ

【作者名】
未来

【あらすじ】
「僕」と「ひかり」の話。２つ目です。１つ目は「メモリーズ」という短編ですのでこの話を気に入られた方はそちらもどうぞ。

雪が降り積もった一月のこと。僕がめざましテレビを見ながらこたつでみかんを食べていると、ひかりはやってきた。
「ねえ、動物園に行こうよ」
部屋に入ってくるなり提案をする。外では雪が降っているのかひかりの黒いダッフルコートは雪で白いまだら模様をつくっていた。
「寒いから嫌だよ。ほら、ひかりもこたつに入りなよ。みかんあげるからさ」
僕は白い部分を丁寧に取ったみかんをひかりに差し出す。
「動物園に行こうよ。外を見てよ。雪で真っ白だよ。こんな雪の中、元来はサバンナに生息するライオンやアフリカゾウたちがどんな生活を営んでいるのか興味があるじゃん！！」
ひかりは必死の説得を続けつつも、さりげなく僕の手からみかんを取りもしゃもしゃと食べている。結局、僕はいつもひかりに負けることになる。
「分かったよ。じゃあ、県立動物園に行こうか」
僕はもそもそとこたつから這い出る。
「その言葉を待っていたんだよ！」
満足そうなひかりの顔。それだけで僕の気持ちは少し温まった。

考えてみると、今までこんな真冬に動物園に行ったことなんてない。そもそも、真冬に動物園は営業しているのだろうか。駅から動物園行きのバスに乗って３０分が経つ。県立動物園は山側にあるため、市街地よりも積雪量は多い。バスの窓越しに見える風景ももはや真っ白だ。
「ねえねえ、ポッキー食べる？来る途中のローソンで買ったんだけど、これ新発売の宇治抹茶味なんだよ」
ひかりから手渡された抹茶味のポッキーを食べてみる。どこか懐

かしい和の味に、僕は少し和んだ。僕の心配をよそに、隣の座席に座るひかりは遠足気分で楽しそうだ。
「ライオン♪しまう—ま♪キリン・モモンガ・レッサーパンダ♪」
深緑色のポッキーを指揮棒のように振りつつひかりが小さな声で唄う。ソプラノがポッキーと共に深緑色のメロディーを奏でる。
「何？そんな歌あったっけ」
「動物園ラブソティーだよ。作詞作曲あたし！」

予想通り県立動物園は雪に埋もれていた。入口の5メートル程の高さがあるはずのゲートも半分以上が雪に埋もれている。チケット売り場までなんとかたどり着いたが、そこには『積雪のため冬期休業中。動物たちは九州の動物園に出張中です』との張り紙があった。
「…悲しい」
ひかりはうつろな目で動物園の中を眺めている。
「でもさ、雪が降る地域に立地する動物園の動物たちが真冬どうなっているのか分かって良かったじゃん。ね、元気だしなよ」
悲しむひかりの小さな肩をたたいて励ました。すると、落ち込んでいたひかりが急に叫び出した。
「ライオンのバカヤロー！百獣の王が雪なんかに負けないでよー！キリンー！首長いんだからこれぐらいの雪で埋もれても息できるでしょー！モモンガー！あんたモモンガ、その…、モ、モモンガー！！」
どうやらモモンガに対する文句は思いつかなかったらしい。僕はそんなひかりを見てて笑いをこらえきれなくなった。ひかりもそんな僕を見てようやく笑顔を見せた。

帰りのバスの中、ひかりはやっぱり少し落ち込んでいた。宇治抹茶味のポッキーも行きのバスですべて食べてしまったようだ。
「ひかり、もう元気だせよ。これあげるからさ」
僕は鞄から取り出したものをひかりに差し出す。

「何これ？」
「新発売のきなこ味のポッキーだよ」
朝、駅に向かう途中に立ち寄ったローソンでひかりは迷っていた。コンビニの店員がつくった『新発売』のポップが掲げられている二種類のポッキーの前で。僕がお茶を選んでいる時に、ひかりは二種類のポッキーの裏面を見比べ、腕を組み首をかしげ、結局、深緑色の方を片手にレジへと向かった。
「え！？やったー。ありがとう。これ食べたかったんだよね」
ひかりの顔がぱっと明るくなった。満足そうにきなこ味のポッキーを食べている。動物は見れなかったけど、明るいひかりを見れて僕も満足だ。
「そうだったんだ。良かった。なんかそんな気がしたんだよね」
きなこ味のポッキーを食べてみる。どこかやさしい味が口と心の中に広がる。
「今日はありがとう。動物は見れなかったけど新発売のポッキーを二種類とも食べれてあたしは満足です」
ひかりはすっかりご機嫌だ。それから駅に着くまでの間ポッキーをもしゃもしゃと食べながらひかりが口ずさんでいたのは、例の動物園ラブソティーだった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3482ba/

---

動物園ラブソティー

2012年1月9日00時51分発行